

ヘブル人への手紙6章「成熟への前進」

1A 希望についての確信 1-12

1B 成熟への前進 1-3

2B 墮落者の結末 4-8

3B 愛の行ない 9-12

2A 神のご計画の確かさ 13-20

1B 神ご自身の誓い 13-17

2B 幕の内側 18-20

本文

ヘブル人への手紙 6 章を開いてください。ヘブル人への手紙は、イエスがいかに偉大な方であるかを教える書物です。万物の相続者であられ、神の本質の完全な現れであり、そして、罪のきよめのためにこの世に來られて、苦しみを受け、血を流されました。この方は肉体を持っておられたので、私たちの弱さをも同情してくださり、私たちが神に近づくときに、恵みの御座からの助けをおりにかなって与えてくださいます。

けれども、ユダヤ人共同体で信仰を持っている兄弟たちは、とてつもない苦しみの中にいました。イエスへの告白のゆえに迫害を受けていました。その時は、神殿がエルサレムにあり、またイエスを信じる信仰は、まさにユダヤ教の中で起こされました。イエスを信じて、これらの儀式や律法を行っている者たちはたくさんいたのです。したがって、そのままユダヤ教の生活の中に埋没すれば不要な摩擦もなくなるし、楽に暮らすことができるという誘惑がありました。その罪の惑わしに対して警告をしているのが、このヘブル人への手紙です。

前回 5 章で著者は、イエスが大祭司の務めを行われたこと、すなわち人の弱さを身にまとい、罪の贖いを成し遂げてくださったことを述べました。イエスは、アロン系の祭司職ではないのに大祭司の務めを行われたことについて、アロン系ではなくメルキゼデク系の祭司職によって彼は大祭司の任命を受けたのだ、ということを読き明かそうとしました。つまり、イエスについて聖書からさらに深く、その御業の栄光を見せようと試みたのです。

ところが、この手紙を読んでいる者たちにはその力がありませんでした。イエスのことをしっかりと考え、イエスの告白をしっかりと守らなければいけなかったのに、世の思い煩いが強くなって、自分のうちに根強く残っている罪を取り除くことに疲れてきて、これ以上、前に進むのが嫌になってきた時でした。そこで著者は、「あなたがたの耳が鈍くなっている。だから解き明かすことが困難だ。」とヘブル 5 章 11 節で話しています。御言葉を聞いているのですが、「このことは私にとっては、ハードルが高い。適当に聞き流しておこう。」という思いが先行していたのです。だから、時が経つば

かりで彼らの実質的な信仰の成長が見られなかったのです。

そうした中で、著者は霊的な成熟に向かうことについて、さらに勧めを行ないます。私たちが、自分の霊的成長がなかなか進まないと感じて苦しんでいる時、もう嫌だなと思う時、この 6 章が大きな励ましとなるでしょう。

1A 希望についての確信 1-12

1B 成熟への前進 1-3

1 ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目指して進むではありませんか。死んだ行ないからの回心、神に対する信仰、2 きよめの洗いについての教え、手を置く儀式、死者の復活、とこしえのさばきなど基礎的なことを再びやり直したりしないようにしましょう。3 神がお許しになるならば、私たちはそうすべきです。

初歩の教えから、さらに堅い食物を食べて成長しようではないか、という勧めです。その初歩の教えが、ここには具体的に六つ書いてありますが、二つが一組になって三組あります。一つは、死んだ行ないからの回心と、神に対する信仰です。これは悔い改めですね、罪からの悔い改めと神への立ち返りです。二つ目は、教会に属することです。きよめの洗いはいろいろな意味合いがユダヤ教にはありますが、イエスの御名による水のバプテスマもその中に含まれます。そして手を置く儀式も、信仰共同体の中で祝福を与えたり、また任命したり、みながあなたと一つだ、共に祈っているのだ、という意味合いを持っています。そして三つ目、死者の復活と永久の裁きは、終わりの日の教えです。これらを、もし神がお許しになるなら、すなわちその先に進むことができるのであれば、そうしていきましょう、と言っています。初歩的な教えに留まっていないようにしましょう、と言っています。

これらの教えが、私たちキリスト教会の教えでもありますが、実はすでにユダヤ教の中にもあったものです。ユダヤ教においては、死んだ行ないからの回心と神への信仰は教えていますし、きよめの洗いや手を置く儀式はいつも行っていましたし、死者の復活や永久の裁きもパリサイ派の人であれば、いつも信じていることでした。すなわち、異邦人である私たちには新しい教えかもしれませんが、ユダヤ教の中に生きている人には初歩的なことなのです。

ですから、私たちに当てはめるとこうなります。私たちキリスト者の信仰は、初めから終わりまでイエス・キリストを知ることです。この方を心に留め、また告白することです。十字架につけられたキリスト、そしてよみがえられ、天におられ、そして再び戻ってこられるキリストであります。けれども、一般の日本人にはあまりにも馴染みがありません。ですから、三浦綾子さんの小説のようなもの、例えば自己犠牲を教えている「塩狩峠」を他の人々に紹介するのは有益でしょう。自己犠牲という考えは日本人にもありますから、キリスト教徒共通項があります。そしてもちろん、そこから踏み出して自分に罪があり、その罪のためにキリストが身代りになって死なれたことをキリスト者は

信じます。けれども、キリスト者がそのような愛の犠牲の良い話の中に留まっていたら、もうそれで終わりなのです。霊的な前進がなくなってしまうのです。

2B 墮落者の結末 4-8

4 一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、5 神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、6 しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。

さて、これはとても難しい聖書箇所です。使徒たちの福音書や手紙の中には、私たちはイエス様を信じれば、御霊によって新たに生まれて、永遠のいのちを得ることが約束されています。「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。(ヨハネ 6:37)」「わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。(39 節)」あまりにもはっきりとした、永遠の保障の約束です。神は私たちが途中であきらめて、お見捨てになるようなことはなさいません。そして終わりの日のよみがえりまで、失われることはありません。

けれども、この箇所は、一度墮落してしまうならば、もう悔い改めることはできない、と書かれています。あたかも、一度私たちがひどい罪を犯して失敗してしまったら、神からの救いは無効にされて、立ち戻ることはできない、とも読めてしまう箇所です。したがって、サタンはこのような箇所を使って、罪を犯してしまったクリスチャン、つまりいたクリスチャンを責め立てます。

けれども、一度失敗をして、それでも立ち戻った人たちの話が聖書に書かれています。その代表がペテロです。彼は、ここに書いてあるように、天からの賜物を味わい、すばらしい神のみことばを味わいました。しかし主を三度も否み、主を見捨てました。けれども、イエス様が復活された後に、彼は悔い改めることができ、そして初代教会においては、第一の指導者となりました。彼は、ある意味で墮落しましたが、悔い改めに立ち返ることができました。ですから、この箇所は、イエス様を愛しているのに、イエス様に仕えているのに、罪を犯してしまった人のことを話しているではありません。

ここの箇所は、ユダヤ教の中に戻ることを意味しています。「墮落」というのは、具体的にはユダヤ教の中に戻ることであり、そして結果的にイエスを否むことであります。信者たちが、顕著な聖霊の働きをエルサレムで、またユダヤ地方で彼らは受けていました。使徒の働きの前半に、ペテロやその他の使徒たちによって、驚くべき主の業が行われていたのを見ました。ここではそれを、「一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わった」と言っています。そしてヘブル書 2 章で著者はすでに、これ

を説明しています。「私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにしたばあい、どうしてのがれることができましょう。この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、そのうえ神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざにより、また、みこころに従って聖霊が分け与えてくださる賜物によってあかしされました。(ヘブル 2:3-4)」

ここまでの確かな証拠をもって、イエスが神の御子であり、メシヤであると示されたのに、そのことを否定するユダヤ教の中に戻るのであれば、他の救いは残されていないのだ、ということであります。クリスチャンが罪を犯して、悔い改める余地がないということではなく、イエス・キリストの告白をすることを怠り、不信者の共同体の中で生きていくなれば、そこには救いはないということの意味しています。

これだけの目覚ましい体験をしても、それがイエス・キリストとの深い関係を持っていることは別問題です。それをはっきりと教えたのはイエス様ご自身です。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』(マタイ 7:21-23)」当時は、ユダヤ教の中でも預言がありました。そして悪霊を追い出すこともしていました。奇跡もありました。そこでイエスの名によって、そのことを行ない始めました。けれども、イエス様は彼らを全然知らない、と宣言されます。

このことは、私たち教会に集う者たちにとっての警告でもあります。目覚ましい体験をしたかもしれませんが、また、キリスト教の団体や教会の中で活発に動けるかもしれません。または、長老、牧師の按手さえも受けるかもしれません。しかし、キリストに結びついていない、信仰とは別の生活をしている、ということは十分にあり得るのです。キリストと共に十字架につけられた自分、そしてよみがえられたキリストを信じる信仰の中で生きなければいけません。これ以外に他に救いの道はありません。けれども、生活の戦いの中で自分の罪が示されて、それがきつくて、それ以上進めないと思って普通の生活に戻ろうと考えます。当時のユダヤ人と同じように、普通に一般の生活をしていれば何事も起こらなかったように暮らすことができます。イエス様を主体的に自分の心の中で、生活の中で告白さえしなければ、表向きはまともな人間として生きられるのです。

しかし、そこには救いはありません。ユダヤ教の中に戻ることは、すなわちキリストを十字架につけた指導者たちと一体になることであります。したがって著者はここで、「自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たち」と言っているのです。本人はその気がないかもしれませんが、どの共同体に付くのか、すなわち御子を頭とする教会に付くか、それともモーセを頭とするユダヤ人共同体に付くのかで、自分自身が誰に付いているのかがはっきりします。

ヘブル人への手紙、また他の使徒たちの手紙に一貫して書かれている勧め、そして命令は、「初めに聞いたところに留まりなさい」であります。「もし最初の確信を終わりでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。(3:14)」これがヘブル書で繰り返されている言葉です。ヨハネの第一の手紙にも、「あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどませなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。(1ヨハネ 2:24)」初めに聞いたこととは、十字架の言葉です。あなたは、罪を犯した。その罪から救われるために、キリストがその罪の供え物とられた。あなたがこの方に救いを求めれば、その罪は赦され、清められ、取り除かれる。あなたは聖なる者とされた。罪から離れた者となった。この方のうちに留まりなさい。この方が天からまた来られて、あなたのその卑しい体を栄光の姿に変えてくださる。この言葉であります。

最初の確信を保っているということは、単に頭で覚えている信仰や信条を口で唱えることではなく、移り行く世、汚れと不法に満ちた世の中で、主体的に告白し、その中で生き、そこで御霊の力が現れて、人々に光、また地の塩として影響を与えることを意味します。だから信仰の戦いなのです。自分の罪との戦いでもあります。だから成熟に向かうことが、とても辛くなる時があります。でも前に進むのです。けれども、その戦いに疲れてしまった信者がエルサレムにいます。そこでヘブル書の著者が語りかけているのです。

7 土地は、その上にしばしば降る雨を吸い込んで、これを耕す人たちのために有用な作物を生じるなら、神の祝福にあずかります。8 しかし、いばらやあざみなどを生えさせるなら、無用なものであって、やがてのろいを受け、ついには焼かれてしまいます。

神が農夫であり、私たちが作物です。イエスさまが、「わたしがぶどうの木で、あなたがたは枝です」と言われたように、私たちの生活から、実が結ばれて、神はその実を見て喜ばれるのです。けれども、イエスに留まるところにある戦い、世からの圧迫、また自分の罪があり、その逆流に自分がそのまま流されるままにしてイエスから目を離す人は信仰を捨ててしまいます。そのような人は、いばらやあざみを生えさせる人であり、実を結ばせることはありません。そのため、神からのろわれ、焼かれてしまいます。

神から呪われ、焼かれてしまうことが地獄のことを意味しているのでしょうか。いくつかの注釈書には、ユダヤ人信者は、七十年のローマによるエルサレム破壊の時に、その直前にイエス様の言葉を信じて都から逃げて命を失わなかった教会に対して、ユダヤ人たちは火の中で滅ぼされた、というところで成就した、と話します。けれども、イエスへの信仰そのものから離れるのですから、地獄の火によって焼かれるという可能性は大いにあります。先ほど永遠の保障の話をしました。それはあくまでイエスのところに来た者たち、イエスに留まっている者たちの話です。イエスに背を向けて、イエスをまったく告白していない人が、同じように永遠に保障されているではありません。

3B 愛の行ない 9-12

9 だが、愛する人たち。私たちはこのように言いますが、あなたがたについては、もっと良いことを確信しています。それは救いにつながることです。10 神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。

四節から八節までにおいて、著者は厳しい言葉を書きました。けれども、ヘブル人クリスチャンはそこまでひどくはなっていませんでした。ただその傾向はあり、潜在的にありました。それで警告の言葉を語りましたが、そこまでには至っていないので励ましています。「もっと良いことを確信していて、それは救いにつながることでよ」と言っています。

それは、彼らの信仰の表れとしての愛の行いです。信仰は必ず行いが伴い、行いは愛の動機による行いです。迫害の時に、エルサレムの信者たちは経済的に窮乏していました。その聖徒たちを互いに助けるその愛が彼らにはありました。兄弟を助けることは労力のみならず、自分への迫害がひどくなる危険もあります。けれども、それを行っていました。その行いを神は決して忘れない、と励ましています。実は、ここの箇所は私たちが日本で働きをして、非常に落ち込んでいる時に、デービッド・ホーキングという、私の愛し尊敬している聖書教師からいただいた御言葉でした。確かに、私は世の楽しみに戻りたいとその時に思いました。適切な御言葉であったと思います。

11 そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。12 それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです。

ここで著者は、熱心であること、なまけないことを勧めています。その熱心さは、希望についての十分な確信、あるいは全き確信と言ってもよいでしょう。疑いや不安が全くない、ぶれることのない確信です。そして、その希望とはキリストご自身です。パウロがこの希望について、ローマ 5 章で詳しく話しています。「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(ローマ 5:2-5)」このように、恵みによって信仰に導き入れられると、神の栄光を大いに喜んでいるところに立ちます。しかしこの世においては患難があるのです。しかしその試練によって、揺るがない希望へと導かれます。

先ほどの話に戻るのです。著者が、イエスが大祭司であられ、メルキゼデクの位の祭司となられたという話をしている、けれども、「あなたがたの耳が鈍くなっている(5:11)」と言いました。鈍くな

っているとは、怠けているということです。霊的成熟に向かうとは、堅い食物であるキリストの栄光についての御言葉を、自分の生活の中に丹念に当てはめることに他なりません。このことを熱心に行っていない状態、怠惰になっている状態であります。

そして、ここで約束のものが与えられて、それを手にするのに必要なのが忍耐であることを教えています。信仰と忍耐の二つは切っても切り離せない関係であると言ってよいでしょう。そして、忍耐をして約束にしがみついた先例の信仰者たちがいることを言及しています。それがアブラハムです。

2A 神のご計画の確かさ 13-20

1B 神ご自身の誓い 13-17

13 神は、アブラハムに約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、14 こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」15 こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。

アブラハムは75歳のときに、カナンの地に行きました。そのときに、「あなたは大いなる国民となり、あなたは祝福される」との神の約束を受けました。そして、子供が与えられるまで、なんと25年待ちました。その間に、イシュマエルによって子を得るという過ちも犯しました。けれども、サラからイサクが生まれ、アブラハムは百歳になりました。ところが、イサクがおそらくは十代の頃、アブラハムは神からイサクをささげなさいと命じられました。彼は、神の約束である、「この子孫から祝福を与える」ということばを信じて、イサクは死んでも、みがえってくると信じて、イサクをささげようしました。そして、イサクをほふるための刀を振り落とそうとしたときに、天から主の使いがやって来て、アブラハムを止めたのです。

その時に、主の使いが、このように宣言されました。「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。(創世記 22:16-17)」主は、ご自分にかけて誓われました。アブラハムの子孫をふやし、祝福されると約束されました。とてつもない忍耐であります。また試練もありました。しかし、その末に約束のものを得たのです。

16 確かに、人間は自分よりすぐれた者をさして誓います。そして、確証のための誓いというものは、人間のすべての反論をやめさせます。17 そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです。

主がご自分にかけて誓われたことについて説明しています。「誓い」を私たち日本人は、普段の生活の中ですることはあまりないのですが、英語圏に住んでいる人は、「～にかけて誓う」という言

葉を使います。「私は、ボーイスカウトの名誉にかけて誓う」とか、「母親の名誉にかけて、誓う」とか、自分が必ず行なうことを確かにさせるために、誓いを立てます。誓うときは、自分よりもすぐれたものを指して誓います。けれども、神は、ご自分よりもすぐれた存在はいないので、ご自分にかけて誓われました。

そして、誓いをするときには、人の議論をやめさせます。「これは、絶対にこのとおりだ。」「いや、違う、それは間違っている。」と議論している時に、「いや、そのとおりだ、私は誓う。」と言ったら、そこで議論はストップしてしまいます。クリスチャンの会話であれば、ある人は、「これは神さまに語られた。」と言ったら、そこで何も反論できなくなります。神が言われたのだから、議論の余地がなくなるのです。そこで神は、アブラハムに与えられた約束は、絶対に確かであることを明らかにするために、誓いを立てられたのです。

そこで神ご自身が誓って、必ずアブラハムを祝福する、彼の子孫によって祝福するという確証を与えられたのです。だから、どんなに時が経っても、むしろ目に見えるところでは逆現象が起こっていても信じます。なぜなら、神が誓われて約束されたからです。

2B 幕の内側 18-20

18 それは、変えることのできない二つの事がらによって、..神は、これらの事がらのゆえに、偽ることができません。..前に置かれている望みを捕えるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。

アブラハムに対して、神が「約束」と「誓い」の二つの事柄によって、ご自分のことばを確かなものとされました。神がアブラハムに立てられた計画は、決して変えられることはありません。そこで、私たちのために与えられている神の約束も、決して変えられることはないことを、ヘブル書の著者は強調しています。私たちは、まだ約束されているものを見ていません。だから、困難なことが起こるとき、私たちの信仰は揺らいでしまいます。「はたして、私がこのように信じていることは、むなしいことなのだろうか。」とつぶやくことも多くなります。けれども、今、著者は私たちに、「そんなことはない。神は誓いをもって、ご自分の計画が確かなことを明らかにされたのだよ。計画は変わっていない。忍耐して待ち望みなさい。」と励ましているのです。

そして、その望みを「捕えるために逃れて来た」と表現しているのが興味深いです。なぜなら、旧約聖書には、「逃れの町」というものがあります。誤って人を殺してしまった場合、殺意がないのに事故で殺してしまった場合、殺された者の親族が血の復讐のためにやって来ても、入ることのできない逃れの町を、神はイスラエルの各地に定められました。そこはレビ人の町でもあります。同じように、私たちはこの世にあって悪霊どもの火の矢に晒されています。しかし、前に置かれている望みが逃れの町となり、そこに入って安全なのです。だから、世の圧迫を受けている時、自分が嫌になる時に、この希望に逃げて来てください！

19 この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側にはいるのです。

希望が、「たましいのための錨」であると書かれています。私たちに、神とキリストについての希望が増し加えられると、その希望によって私たちの信仰は堅くされ、信仰が堅くされるので、忍耐をすることができ、忍耐するので、私たちは愛をもって人々に仕えていくことができます。愛の奉仕も、また信仰生活もみな、イエス・キリストに対する希望によって確かにされており、そのためここで「たましいのための錨」と呼ばれているのです。

ヘブル書2章1節において、「押し流されないようにしなければなりません。」と書かれています。ボートが岸辺から離れて、いつの間にか漂流していくように、私たちもいつの間にか、信仰から離れるという危険性があります。けれども、錨があれば安全です。押し流されることはありません。イエス・キリストに対する希望は、このように私たちのところに何が押し寄せても、しっかりと立っていることができるような、錨の役を果たします。だから、今の学びはとても大切です。

そして、「またこの望みは幕の内側にはいるのです」とありますが、幕の内側とは至聖所のことです。聖所は、ケルビムが織り込まれている垂れ幕によって、聖所と至聖所に分けられています。私たちの希望は、至聖所の中にはいっていくということです。これは、言い換えれば、神の御座の中に入っていくということです。私たちは今、大胆に、神の恵みの座に近づくことができます。それは、イエスさまが、血を流して、私たちの罪をきよめてくださったからです。

20 イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。

イエスさまは、私たちが父なる神に近づく前に、まずご自分が天の中に入られました。そして、天において、神の右の座に着かれました。私たちは今、御霊によって、霊的に父なる神に近づくことができますが、将来は、実際に、天の御座に近づいて、神とキリストを賛美して礼拝することができるようになります。黙示録4と5章には、携挙された教会が、小羊イエスを賛美している情景が描かれていますが、私たちがそこにいるのです！

そして「永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。」とありますが、次の7章にて、イエスさまが、メルキゼデクの大祭司であることが説明されています。イエスさまの働きを知ることが本当に大切なのです。この働きを知って、私たちが希望を持つことができ、そしてこの希望が私たちのたましいの錨となり、困難や試練が訪れても押し流されることがないのです。墮落する者たちは、自分たちの踏ん張りが足りなかったから墮落したのではなく、この希望の錨を持っていなかったら、墮落したのです。私たちは、自分たちで自分を支えるのではなく、神の約束と信じる信仰と、その希望によって支えられます。